
phantom ~ 幻の街 ~

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

phantom 幻の街

【Nコード】

N9459E

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

幻の街、ファントムシティ。それは夢なのか現実なのか、この街は酷く曖昧な場所に位置する。現実を覚めない夢と称するなら、夢と認識されない夢もまた確かな現実としてそこにあるのではないか。それは非常に曖昧で支離滅裂で酷く都合のいい現実として。この物語は、そんな街に住まう一人の女性の一日である。

プロローグ

幻惑の漂う街、ファントムシティー。人々は日々を夢見る。幸せな夢、悲劇の夢、欲望の夢。夢はありとあらゆる色に染められてゆく。

人は夢を見るとき現実と夢を区別することができるだろうか？たとえ支離滅裂な夢であっても、それはそのものの希望の織りなすものなのだ。

幻惑の漂う街、ファントムシティー。人は日々を夢見る。それが夢だということに気がつくことなく。

これは、そんな街の物語。

(1) 本の部屋

夢は現実であり幻でもある。そんなことをいつていたのはいったい誰だったろうか？

私は夕焼けに染め上がる町並みを静かに見下ろしていた。古びた腰掛け、年代物のテーブル。私の膝に置かれているのは数百年前にとつくに絶版になった古めかしい、カビの生えたような書物。

私は、それを取り上げた。

夢は現実であり幻でもある。

ああ、この本に書かれていたフレーズだったか。私は思い出した。私は少し前までこの本を読んでいたのだった。

そして、ふと街が夕焼けに染まっていたことを思い出したのだった。

私は本に琴をするとテーブルの上に置き、そのそばに置いてあった紅茶のカップをとった。

すでに中身はなくなっていたが、それを手に取っているだけで心が落ち着く。

紅茶のカップを手に取りながら夕日を眺める。私にとって一日で一番心の落ち着く時間だ。このときのために明日も生きてみようかと思えるものだ。

たとえ雨の日であっても、その次の日はこの夕日が見られるだろう・・・そんなことを思いながら。

そういえば、雨の日などあったか。私は雨という言葉は知っているが実物を見た覚えはなかったような気がする。

いや、見ようと見まいとそれはどうでもいいことだ。

沈み行く夕日。花は散るときが一番美しいという言葉の通り、日の光も沈み行くときが一番美しく見えるのかもしれない。

私は窓枠に飾られた鉢植えを見た。エーデルワイスの花。私の一番好きな花。なぜ好きなかは忘れてしまったが、これを見ると心が和やかになってくる。

夕日の光もずいぶんと淡くなってきた。

私は手を伸ばし、テーブルの上のランプをともした。

夕日のような赤々とした光が部屋に暖かく照らす。

私は街が闇に沈んでゆくのを見るのは嫌いだった。まるでまぶたを閉じてゆくようで、そう、街が死んでゆくのを見るような気がしてならないのだ。

さて。

私は立ち上がると読みかけの本を手に取り本棚に足を運んだ。狭いこの部屋にあるものといえば、窓際のテーブルと大きな本棚が3つほど。これだけで私の部屋のほとんどは埋もれてしまっている。

私はそれが好きだった。と言うよりは、むやみに広いところに身を置くことが嫌いだったのだ。

ふと・・・私は気がついた。

手の中にあつた本がいつの間にかなくなっている。

はて・・・。

私は周りを見回した。テーブルから取り損ねたわけでもなければ途中で落としてきたわけでもない。

テーブルにはランプと紅茶のカップしか置かれていないし、もし落としたとしても音で分かるはずだ。

私の本は実に気まぐれだ。こんなこと、珍しくもない。まあ、ゆつくりと探すことにしよう。この狭い部屋だったらすぐに見つかるだろう。

私は、とりあえず一息つくために再び窓際の椅子に腰をかけた。

そのついでに窓を閉め、カーテンを引く。部屋はいよいよランプの光のみの照らす空間となった。

日の揺らめく儂い光は何となく夕日に似ている気がして私は好きだった。

さて、どこから探したのか。

私は椅子にゆつくりと腰を落ち着けた。

この間は本棚の方から順番に探していった。今回はその逆でテーブルの方から探してみようか。

いや、一つ部屋の向こうの寝室から探してみようか？あんなところにはないかもしれない。しかし、さつき持っていた本は私の持っている本の中で一番気まぐれな本だから案外そっちの方にいるのかもしれないね。

自分自身で本棚に帰ってゆく奴もいるけど、あれはそんな気を利用させる奴ではないことは明らかだな。

そういえば、前の前の本は台所の食器棚の中にいたっけ。寒がりなくせにあんなところにいるから、しばらく読めなくなってしまったじゃないか、しょうがない本たちだね。

私はゆつくりと腰を上げた。

とりあえず、テーブルの周りから探してみることにしよう。

といつても、テーブルの周りには何も置かれていない。……仕方ない、ほかを探すことにしよう。

私はものをごちゃごちゃと置いておくのが嫌いだ。いらぬもの

はいらないし、必要なものはその時になって手に入れればいい。

本は別、あれはかつてにここにいるだけ。別に迷惑しちやいないけどさ。

私はランプを取り上げた。

よく考えてみると、部屋は夜の帳に包み込まれていて足下さえよく見えない。

秋のつるべ落としとはよく言ったものだ。もっとも、今は秋ではないけど。それに、私はつるべというものさえ見たことがない。

なぜこんな言葉を知っているかって？それは本たちが教えてくれるからさ。あいつたちは気まぐれで自分勝手、しかもしょっちゅういなくなるしわがまま。いつも同じことしか言わないけど、私にいろいろなことを教えてくれる。

まあ、本なんてそれだけのものなだけでさ。だけど、それだけでもいいじゃないかな。後は何も言わないし、私に指図するものでもない。

さて、どこを探そうか。この前と同じところにいることはないだろうけど。一番近い本棚から探そうかね？

カーテンから漏れ出す本当にわずかな光がランプの光と相成って儂い影を作り出す。

私は私自身の影を追うようにゆっくりと本棚の方に足を運ぶ。

確か、あの本は一番奥の本棚にしまわれていたな。あそこら変の本は普段滅多に読まないものだから、本たちがすねていないといいんだけどね。

私は本たちをゆっくりと撫でながら棚の隙間を歩いていった。

やっぱり、ここにはいないようだね。

あの本がいるはずのところはちょうど空白となっていた。まあ、当然か。あの本の性格だったら自分からおとなしく本棚に戻るはずもないだろうね。

薄暗い本棚の谷間に私の持つランプの光が漂う。本たちはまぶしそうに身をよじる。まあ、私がそう見えるだけで本たちは実際に動

いているわけではないのだけど。

ふと、私は耳を澄ませた。

静寂に包まれている部屋の中で何かか蠢く音がしたような気がする。

それは私の足下から聞こえてきたような……。

私は物音を立てずにゆっくりと足下に光を落としていった。

いたいた。

私の探していた本だ。

まるでイタズラをした後の子供みたいに本棚の下にうずくまっている。私はゆっくりとそれを取り上げると、そつと背表紙を撫でてやった。

悪い子だ。だけど、そういうところも私は好きだよ。

この本たちは私を飽きさせない。

この変化のない世界で唯一私に安らぎと楽しみを与えてくれる存在だから。

私は本を元の本棚へそつと返した。

お休み……。

私がそつ一言告げると本たちは心なしかどこか安らかな表情になったような気がする。

もう、夜も遅い、私も寝ることにしよう。

明日になればまた今日と同じような一日がやってくるだろう。だけど、私はこの本たちがいるかぎりなにも不安になることはない。

窓の外には夜の闇に混じって星と月の優しい光が街に降り注いでいた。

E n d

(後書き)

この物語には意味はなく、彼女が過ごす一日もまた意味のないものである。そこに意味を見いだすこと自体がナンセンスである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9459e/>

phantom ~ 幻の街 ~

2010年10月8日15時29分発行